

五島市富江地区まちづくり協議会未来会議の運営に関する調査研究 ー地域住民と大学生の交流を通してコミュニティ活動の活性化を中心にー

ブレンディ バロリ*

五島市役所の関係者によると、2014～2015年度に市内の13地区にまちづくり協議会（以下、「協議会」という）を設置し、地域の課題解決に向けた地域住民の主体的な住民自治の活性化を推進している。各協議会には、部会の開催や地域住民の座談会など、定期的な地域住民の話し合いをベースにした運営を推奨しているが、多くの協議会において場の創出が進まない状況があり、また、話し合いの効果的な進行ができない等の課題が生じている。

この状況を、外部の視点、大学の専門分野における学びを活用した取組により改善し、地域住民の地域づくりに対する意識醸成と主体的なコミュニティ活動の活性化を図ることは本研究の目的である。さらに、地域住民と大学生の交流を通して、五島市に関心を持つ人材（関係人口・交流人口）の確保につなげると期待する（本研究の仕様書 2. 目的より）。

Keywords：地域の課題解決、コミュニティ活動の活性化、地域住民と大学生の交流

I. はじめに

日本の地方では、人口減少と高齢化が進み、かつ、地域社会の課題は多様化・複雑化している。そこで期待されているのは、地域を最もよく認識している住民が主体となり、地域づくりに取り組むことである。様々なステークホルダーとともに住民が、地域課題を解決し、地域を活性化し、多様性あふれる地域が創られることが期待されている¹。

さらに、人口減少や少子高齢化が進んでいる中、地域コミュニティのリーダー

* 本論文の執筆にあたり、2024年度のパロリゼミ（専門ゼミ）のメンバー：河津 侑実、小西 浩正、坂口はるな、志賀 咲歩、末綱ことは、田橋 叶望、辻 明日香、直塚 愛、三島 茉莉、森 久瑠美、森田 陽菜は協力者である。

シップの欠如のため、コミュニティの弱体化に苦しんでいる。その結果、多様なコミュニティの発展と活性化を主導することが住民の責任となっている。しかし、住民の努力は、数年の活動の後、停滞してしまうことがよくあることが指摘されている。

今村（2024）は住民主体の地域づくりを継続させるため、様々な調査がなされ、部分的な有効策の提案がなされている。しかし、地域づくりとは、個人及び団体が様々な活動を経験していくものである。そのため、活動が部分的に優秀であっても、長年継続していける団体になるとは言い難い。例えば、地域資源を磨く計画は素晴らしいものであっても、情報共有がなされない団体であったり、組織体制に団体構成員の多くが不満を持っていたりすれば、活動の効用を団体構成員が実感できるまで、活動を継続することは難しい。また、活動はそれぞれ独立しているわけではない。例えば、地域外との交流が、自己資金を生みだし、地域の良さの再認識や、やりがいにつながっている。このことから、活動全体を網羅的に把握する必要があると今村が指摘している²。

岩原（2007）は、地域づくり主体の形成過程として、多角化路線の選択からはじまり、第Ⅰ期である「地域づくりの意識化」、いわゆる、「生活のため」や「夢のため」の個別の生活課題や関心から地域づくりを意識化し、第Ⅱ期「地域外との交流と地域づくり」地域外の人々との交流を通じ、具体的に地域づくりに取り組みはじめた時期であると挙げられている。さらに、第Ⅲ期：「実践の継続」と地域内協同で、それまでの活動を総括し、「実践の継続」が課題となり、さらに地域内へと協同関係が広がりはじめる時期であると明確にしている³。

さらに、出口ら（2022）は、これまで地域内の意思決定やお祭りなどの自治・共助活動、まちづくりの地域活動は、自治会・町内会が中心で行われてきた。しかし、人口減少や加入率の低下による構成員の減少、市町村合併に伴う地域課題の多様化・広域化などを背景に、自治会・町内会が従来の役割を果たすことが困難となる地域が出はじめている。このため、自治会・町内会の機能を補完しつつ、市民団体やNPO法人などとの協働により、「地域経営型」自治への深化が求められていること挙げられている⁴。

久（2005）は、住民主体のまちづくりプロセスのあり方について考察を行なった研究に、情報共有・課題共有のための「交流の場」の設定から、課題解決をめざした「まちづくり協議会」の設立、そして協議会における構想づくりから具体的な事業・活動への流れを、いかにむすびつけまちづくりの実践へとつなげていけるのかについて考察した。

まちづくりの契機として「交流の場」づくりが重要であること、また、交流の場からタスクフォースとしての「まちづくり協議会」が生み出されることを指摘し、さらに、住民提案としてのまちづくり構想から行政計画としてのまちづくり計画へという2段階で考えることが大切であることを明らかにした⁵。

II. 活動内容

五島市の関係者と協議し、活動が有意義なものとなるよう、以下の日程を決定した。

長崎県立大学夏の地域活動 地域協働課主幹											
期 間：令和6年8月11日（水）～8月13日（金） 場 所：長崎県五島市 富江・奈留（富江宿泊） 訪 問 者：パロリ先生ゼミ（11人）											
対 応 者：五島市 地域協働課：川口さん 地域協働課：山下さん 地域協働課：北川さん 富江支所：飯田さん 地域協働課：野澤さん 富江集落支援員：平山さん											
月日	行 程										
9/11 （水）	11:30 長崎フェリーターミナル 超高速船 11:05発										
	12:55 富江港										
	13:00 フェリー (0:05)										
	13:30 昼食 鬼岳四季の里（視察）										
9/12 （木）	14:00 公用車 (0:30)										
	14:10 市内 市内視察 郷土資料館・二三美術館（視察）										
	15:10 公用車 (1:00)										
	15:40 富江 集落点検 富江の散策										
9/12 （木）	17:00 富江の散策										
	19:00 富江公民館 ワークショップ まちづくり計画を動かそう（メイン）										
	21:00 まちづくり計画を動かそう（メイン）										
	22:00 宿泊 富江 高橋さんとこ										
9/12 （木）	7:15 宿出発										
	7:30 富江港 オーシャン乗船 本日の流れ確認										
	8:00 本日の流れ確認										
	8:50 奈留⇒ガイダンスセンター 視察 まちづくり協議会会長との交流（奈留神社例大祭の話など）富江と対比するための視察										
9/12 （木）	11:20 奈留島内視察 もやい場 手作りカレーライス										
	11:30 手作りカレーライス										
	12:50 午後から玉之浦										
	7:15 講演・ワーク 1. パロリ先生の講演「（観光を活かしたまちおこし）」（60分） 2. パロリ先生のお話を基にして、「計画を策定するために何をするか」座談会（30分） 3. 参加者の質疑										
9/12 （木）	13:00 市役所内										
	15:30 各課 挨拶など										
	16:40 市役所内										
	17:15 各課 挨拶など										
9/12 （木）	17:30 晩御飯										
	20:00 宿泊 富江										
	20:40 宿泊 富江										
	20:40 高橋さんとこ										

[illegible]

以下に学生たちが3日間の活動を通して、感じたことなどについて述べていく。

1. 現地の FW について

9月11日に実施したフィールドワークについて。

富江の商店街を市役所の関係者の解説の元、散策し、鬼岳の絶景を眺め、山本二三美術館、郷土資料館の見学と視察した。視察後、昼食には、五島で有名な五島うどん、食用の椿油を練りこんで平たく伸ばした椿そばを頂いた。夜には、富江の住民の方々をお呼びして一緒にワークショップを開催した。

「子供時代にあったもの、復活させたいもの」というテーマで富江をより暮らしやすく、楽しい街にするためにはどうしたらいいかを地域住民の方々と意見を出し合いながら一緒に考え、地域住民の方々は、初めて訪れた場所で何も知らない私たちに富江の魅力を時間が足りないほどたくさん教えてもらった。地域のつながりがとても強く、本当に富江のことを心から愛しており、富江に貢献したいと思っている方々がたくさんいらっしゃる素敵な街だと実感した。

9月12日に行ったフィールドワークについて。

まず保育園から高校までが合併されている奈留高を訪れた。そこでは、歌手である松任谷由実氏が、その当時、校歌がなかった奈留高へ贈った名曲「瞳を閉じて」の石碑も建てられ、この歌は今では奈留島の愛唱歌となっている。また、隠れキリシタンに関する集落が世界遺産に登録されて有名な江上天主堂も訪問した。その後、山道を車で抜けて千畳敷へ向かい、小島の山の緑、浸食された奇岩、紺碧の海とのコントラストがとてもきれいで、すごく魅了があると感じた。千畳敷を含む舅ヶ島・奈木崎海岸地域は、県内14カ所の自然環境保全地域のうち、特に学術上重要な地形や自然豊かな植物形態が残る特別地区に指定されている。お昼には、鵜飼の場

と軽く結んでもほどけないという意味の「もやい結び」をかけてできた〈もやいば〉の「どがんね」というお店で海鮮カレーを食べた。午後は、ゼミ担当のバロリ先生の地域振興についての講義行い、その後は「よそ者」から見た奈留島の面白い所というテーマで奈留島の地域住民の方と意見交換を実施した。そこで出た意見として、千畳敷は砂浜ではなく砂利だったので新鮮だった。どこへ訪れた際も島の方々積極的にコミュニケーションをとってくれて温かく迎え入れてくれた等の意見があった。その後は、地域の方々が運営している学習塾「しまなび舎」を見学と視察、最後、奈留島を出港するときはお別れの紙テープでお見送りして頂き、地域住民の皆様には私たちの姿が見えなくなるまで手を振っていただいた。奈留島の自然豊かさ、人の温かさに触れたとても充実した1日だった（2024年度、富江まちづくり協議会未来会議運営等に係る研究（受託研究）の報告書から転載）。

2. 五島市の概要

五島市は九州の最西端に位置し、海上を西南から北東へ約150kmにわたって斜走している。面積は634.09km²で、本県の主な離島の34.0%を占め、県土全体の15.3%に相当する。五島列島を構成する島は129（うち有人島18）島にも及ぶ。

表1. 地区別人口推移（単位：人）

年度	福江	富江	玉之浦	三井楽	岐宿	奈留	人口計	増減
令和2年度	22,576	4,377	1,211	2,514	3,079	2,052	35,809	▲543
令和3年度	22,230	4,240	1,202	2,448	3,014	1,959	35,093	▲716
令和4年度	21,989	4,159	1,179	2,376	2,955	1,884	34,542	▲551
令和5年度	21,673	4,022	1,139	2,338	2,901	1,788	33,861	▲681
令和6年度	21,431	3,920	1,110	2,279	2,804	1,735	33,279	▲582

出典：五島市統計書（令和6年版）より転載

表2. 地区別世帯数推移（単位：人）

年度	福江	富江	玉之浦	三井楽	岐宿	奈留	世帯数計	増減
令和2年度	12,138	2,384	759	1,443	1,665	1,283	19,672	▲72
令和3年度	12,085	2,355	754	1,421	1,636	1,237	19,488	▲184
令和4年度	12,103	2,336	753	1,393	1,632	1,200	19,417	▲71
令和5年度	12,035	2,282	744	1,388	1,627	1,155	19,231	▲186
令和6年度	12,030	2,247	725	1,361	1,602	1,127	19,092	▲139

出典：五島市統計書（令和6年版）より転載

人口・世帯数の推移をみると、人口は昭和30年の14万9,583人をピークに若年の

労働者層が島外へと流出し、平成27年度の国勢調査によれば5万7,045人と、ピーク時の4割以下となっている。現在の五島市における人口減少は、高校卒業生の9割以上が就職・進学で転出していることによる社会減、及び出生率の低下等による自然減が主な原因とされている。その対策として現在五島市ではUIJターン支援事業に注力しており、都市部への情報発信や空き家バンクの充実、良質な雇用の場の確保等のサポート体制を強化したことで近年移住者の増加がみられる。

3. 富江町の概要

富江町の人口は約4,000人、世帯数は2,277と高齢化率は42.55%である。富江地区は福江地区に次いで2番目に人口の多い地区であり、昔はサング礁・捕鯨・イセエビ産業等が盛んだが、今現在サング加工が二軒残っている程度まで減少している。また、キャンプ村や海水浴場など自然の中で遊べる環境が身近にあり、富江町をぐるりと巡る海岸線のサイクリングコースも人気であるが、高校がないため、町を離れる人が多いという負の面もある。陣屋石倉、指定無形民俗文化財オネオンデなどの歴史的文化遺産が数多く残されている魅力あふれる町として知られている。

続いて奈留島はかつて、鳴島と呼ばれ、五島列島の真ん中に位置し面積は約25km²で、奈留島の周辺の葛島（かずらしま）、前島などの付属島を町域として有している。奈留島は、歴史が深く奈良時代に遣唐使や遣明船などの寄港地であったという記憶が残されており、遣唐使が中止となった後も大陸と日本の中継地として発展してきた。人口は、昭和32年11月時点で約10,000人をピークとなったが、現在では約1,500人に減少している。平成16年に下五島一市五町の合併により、現在は長崎県五島市奈留町となり、主な産業は漁業で変わらないものの、近年は世界遺産の江上天主堂や豊かな自然を生かした観光にも力を入れている。また、人口減少改善の取り組みとして離島留学生の受け入れを開始している。

富江町と奈留島の類似点として、人口減少があげられる。平成24年から令和6年にかけて富江の人口減少人数は1,194人、比率にすると22.9%の減少である。奈留島の人口減少人数は978人、比率にすると35.15%の減少であり、五島市全体での減少率で見た時、富江は8位、奈留島は2位という高い数値でどちらも人口減少が進んでおり、特に奈留島の方は厳しい現状である。

反面、富江町と奈留島の相違点としては、まず町内会の会議頻度が異なることが挙げられる。富江は町内会の集まりが年に一回で、毎年町内会長さんが変わるため既存事業以外の話し合いができず、なかなか新しい取り組みが始まるとしないのは現実である（データは当時の五島市関係者の解説による）。奈留島は、月に一回の

集まりで、町内会長さんが変わらないため、多くの人が発言する機会がなく、固定された概念のままになってしまっているという現状である。また産業の違いとして、富江は内陸の農業や畜産業が得意なのに対し、奈留島は、漁業が長けている。

Ⅲ. 富江ワークショップでの各班の発表

1. 【体験型ツアーをしよう！】志賀咲歩・河津侑実

私たちの班では、「子供時代にあったもの、復活させたいもの」というテーマで富江の地域住民の方々とお話をさせて頂いたところ、いももち、黒島だんご、てのひらだんご、かいずし等ここには載せきれないほどたくさんの回答をいただきました。私たちが知らないものばかりで色んなエピソードや作り方を学びながらお話ができてすごく楽しかったです。では、これらを今の子供たちに知ってもらうにはどうしたらよいのか考えたところ、食べ物の名前だけを聞いてもどんなものか想像がつかないものばかりであるため、実際に地元の方々と一緒に作り方を学びながら当時のエピソードなどを聞ける交流ができる体験型ツアーができればいいのではないかと考えました。

具体的内容としては、地元の公民館での集まりや、クラブなどでの一貫活動として伝統的な食べ物づくりを取り入れることです。地域住民の方々からは、とみっこクラブなどの子供たちのクラブがあることを教えていただきました。

しかし、ただ開催するだけでは地元の子供たちも、教えてくださる地域住民の方々も集まらないと考えました。そこで私たちは、班の地域住民の方々に今回の交流会はどうやって知ったのか伺ったところ、近所の方からたまたま聞いた方や、地域おこし隊の方々から直接聞いた方などがいらっしゃいました。この話を聞いて、富江町の強みは、地域住民同士のつながりの深さだと考え、このつながりを生かして、体験ツアーの宣伝を行えば良いのではないかと考えました。

2. 【おだんご教室で文化を学ぼう！】田橋叶望

私たちの班では、主に五島の富江地区の住民たちが昔よく食べていた食べ物についてフォーカスを当て、今後実施したらよいのではないかとという取り組みについて考えました。そこで大きく話題に上がったのは、かんころだんごや黒島だんご（よもぎやそら豆のだんご）、手のひらだんごといった、おだんごでした。これらは住民方のおばあちゃんがよく作ってくれたおやつだそうで、家によって少しずつだんごにも違いがあるという面白さを持っています。（これについては、彼岸になると

それぞれの家でカラフルなおもちやおだんごを作り、それぞれに違いがあるため、親戚と物々交換していたという話を伺いました。）また、現在はあんこや芋（あん）を入れてお団子を作ることが多いが、以前は砂糖やきな粉が一般的だったり、最近はその文化がなくなってきたいたりの違いがみられました。

そこで私たちは、昔の文化を知ってもらうということを題材に、おばあちゃんらと子どもと一緒に作るおだんご教室を提案しました。おばあちゃんらと一緒に作ることで、文化を教えつつ、楽しみながら実習できると言えます。

そして特にかんころだんごに焦点を当てて、一貫性を持った取り組みにすることを考えました。かんころだんごというのはさつまいもからつくられるだんごであり、かんころもちも専用の機械で作るのに対して、かんころだんごは家でも作れるような手軽さを持っています。この特徴を活かし、小学校でよく行われるさつまいも掘りの授業と連動して取り組むことを考えました。授業では、さつまいもを植えることと収穫することのみ実施し、取れたさつまいもは各家庭に持って帰るという現状にあります。そこで、せっかく収穫したさつまいもを調理実習のような形で文化体験に変えることができたらいいのではないかと考えました。この取り組みをすることで、今と違う昔のかんころだんごを知ることが出来るほか、それが何からできているのか、どうやってできているのかまで学ぶことができる、有意義な取り組みになると予想されます。

3. 【昔なつかし料理教室】坂口はるな・森田陽菜

4 班は、昔食べたお菓子を作る料理教室を開催する案を提案致します。

富江町では、老人会・農協青年部にて、富江そばの手打ち体験を開催していることとお聞きし、このお話をもとに町民の方が「昔よく食べたお菓子・食べ物」を今の子供たちに伝えるための料理イベントを行うことを考えました。対象としては、小学生低学年向けで行い、親子で参加できるようなイベントにしていきたいと思っています。対象として小学校低学年を選んだ理由は、住民の方の中で、高学年で家庭科実習が始まる前に包丁の扱い方を教えなければならず、困った経験があるという話を聞き、イベントに参加しながら包丁の扱い方や料理することの楽しさを学んでいくことができればと考えたからです。効果として考えられるのは、このイベントを開催することで、世代を超えたコミュニケーションの輪が広がり、よりつながりの強い地域になるのではないかと考えます。

4. 【爆食！富江のうまいもんツアー】 末綱ことは

本班では子どもが学校からの帰り道に木の実などの自然の食を楽しみ、さらには家に帰ってからも富江の“うまいもん”をたらふく味わうことができる爆食ツアーを組み立てました。また、話し合うなかで複数の木の実や料理、お菓子の名があがったことからそれらを旬の季節ごとに分類し、最終的には「夏編」「冬編」の2つの爆食ツアーが完成しました。

まずは「夏編」ですが、帰り道には甘酸っぱいのんめやグミの実を摘み、家ではおやつとして黒島だんごや手のひらだんごを味わってもらいます。そして夕食には富江の海で取れた新鮮な魚を使った角寿司や伊勢海老、ウニみそやフグの夜干しといった高級海鮮を楽しむことができるという豪華なツアーとなっています。次に「冬編」では、子どもの頃に誰もが経験したことがあるであろう花の蜜吸いを富江に豊かに咲く椿の花で味わい、家に帰ってからはかんころ餅やぎょうせんなどの甘味を楽しんでもらいます。そして夕食には温かいご飯に相性抜群なかきみそを食べるといった、冬ならではの様々な富江の食を満喫することができるツアーとなりました。

また、今回の活動内では「食べる」ことのみにフォーカスを当てて話し合いを行っていましたが、さらに調理体験という形で富江の食文化に「触れる」機会も創出できたら良いと考えています。これらのツアーが、富江の子どもたちが富江の食文化を楽しみ受け継いでいくことはもちろん、大人も富江の魅力について振り返ることができる機会創出の一助となれば良いです。

5. 【子ども食堂で富江の伝統料理を作ってみよう！】 直塚 愛・森久瑠美

私たちの班では、ワークショップで住民の方々から伺った富江の伝統的な食べ物や料理を実際に子どもたちに作る場所から携わってもらい、子どもたちが自分たちの作ったものを味わってもらうという取り組みを考えました。

現在、富江町では子ども食堂が実施されています。そこに料理の体験イベントを盛り込むことで、子どもたちが用意された料理を単に頂くのではなく、子どもたち自らが調理から関わり、富江の伝統的な食べ物・料理に触れ、学び、地元への理解を深めてもらうという狙いがあります。

体験イベントの内容を具体的に説明すると、まず、現在行われている子ども食堂の場所などを利用し、月に一回富江の伝統的な料理や食べ物をよく知る地元住民の指導の元、子どもたちに調理体験をしてもらいます。月やシーズンごとに料理の内容やテーマを決め、多くの伝統料理に触れてもらうといった内容になります。さら

に、富江にいる移住者と地元住民との交流があまりなされていないという現状があるとのことなので、そのような移住者も巻き込むこともできればよいと考えます。

この体験イベントを実施することで生まれる効果として、まず、子どもが地元の伝統料理の素晴らしさを知る機会が生まれ地元への愛着が湧くということが挙げられます。次に、世代を超えた地域住民の交流の場が創出され、緊張した雰囲気ではなく、和やかな雰囲気が期待されます。そこには、かしこまった会話ではなく、自然に生まれる会話も期待されるでしょう。最後に、伝統料理を学んだ子どもたちが大人になった時、若い世代に富江の伝統を受け継いでもらうという効果も生まれます。

6. 【野生にもどろうプロジェクト！】三島茉莉・辻明日香

私たち1班では、「野生にもどろうプロジェクト」を考えました。主に二つの軸を考えています。

一つ目は、「素潜り体験」です。昔やっていたことの中で、自分で海に入ってみななどをとっていたというお話がありました。そこで私たちは、漁師さん監修のもと、みなやサザエなどの貝類を、自分で潜って捕る体験をできるようにすることを提案します。

さらに、今、ウニの急激な増加により海藻が減少しているため、ウニの駆除を必要としています。それを「うにの指名手配イベント」として子どもたちにも協力してもらうことで、子どもたちの経験としても、漁師さんとしてもいいのではないかと考えました。

二つ目はかんころもち作りです。子どもの頃干してあるかんころをとって食べていたという経験から発案しました。実際に混ぜて作って、体験学習になります。

一連の流れを一日で行うのは難しいため、干し芋を作るところから、餅米と混ぜてできあがるまでの工程を二つに分けて、参加してもらうようにします。もちろん時間があれば両方の工程に参加してもらっても大丈夫なようにします。

きちんと見てくれている人がいることで、ご両親も安心して子どもを預けることができるし、親子で参加すればふれあえる良い機会になると考えました。さらに自然のものを自分でとって、つくって、食べるという一連の体験をすることで、普段食べているものの背景を考えるきっかけになるし、作ってくれた人に感謝の気持ちを持って味わって食べるようになる。自然豊かな五島だからこそできる、楽しい体験型イベントになればいいなと思います。

7. 【食育ツアーで五島を知ろう！】小西浩正

私たちの班では、五島の多くの魅力をどのように次世代に伝えていくかについて話し合いました。その際、五島の伝統文化に対する地域の子供たちの関わりが減少している現状が大きな課題であることが分かりました。現代では地域のつながりが希薄化しており、伝統行事や風習が忘れ去られつつあります。この状況を打破するため、私たちは特に「芋まんだかな」という五島の伝統行事に焦点を当てて、それを次世代に伝えていこうと考えました。

「芋まんだかな」はもともと、十五夜の時期に子供たちが近所の家を訪れ、さつまいもや供え物を受け取るという習慣から始まった行事です。この行事には地域の結束や互いに助け合う精神が根付いており、地域全体で子供たちを見守り育てるという文化が感じられます。このような地域の伝統が、今の子供たちにとっても重要な学びの場であると考え、私たちは「芋まんだかな」を通じて、地域の伝統や文化を新たな形で継承する方法を検討しました。

私たちはこの「芋まんだかな」を現代の子供たちにも楽しんでもらえるよう、ハロウィンのようなイベントとしてアレンジすることにしました。「芋まんだかな」を通じて地域の子供たちが五島の伝統や食文化を学べる「食育ツアー体験」を計画しています。具体的には、子供たちが毎月15日に近所の家を訪れ、「芋まんだかな」と言いながらお菓子や食べ物をもらう活動を実施します。この活動では、単にお菓子をもらうだけでなく、その過程で五島に関する知識や歴史を学ぶことができます。例えば、五島の特産であるかんころ餅や五島うどんについて、その歴史や作り方を知る機会を提供します。班のメンバーの一人が五島うどんを作っている方であることから、その方に協力をお願いし、うどん作り体験を企画することも検討しました。子供たちは実際に五島うどんを作ることで、食べ物をただ受け取るのではなく、自分の手で作ることの楽しさや食べ物大切さを感じることができるでしょう。また、かんころ餅の作り方を学び、実際に材料に触れる体験を通して、五島ならではの食文化に親しむことも可能です。さらに、「芋まんだかな」を通じて地域に自生する自然の恵みにも触れてもらいたいと考えました。五島の自然には、アケビやミカン、クワの実など、昔から地域の子供たちが山遊びの中で見つけて楽しんできた植物があります。こうした自然の恵みを取り入れることで、子供たちが地域の自然について理解を深め、興味を持つきっかけになると考えています。自然に触れる体験を通じて、子供たちは身近な環境の豊かさや、その中にあるさまざまな資源の価値を学ぶことができるでしょう。ハロウィンで「トリック・オア・トリート」と言ってお菓子をもらうように、「芋まんだかな」を通じて地域の家々を巡りながらお菓子や

五島の伝統的な食べ物を受け取ることで、子供たちは五島の食文化や歴史、そして地域の温かい人々との触れ合いを体験できます。これは単なる遊びにとどまらず、五島の伝統や地域社会のつながりを次世代に引き継ぐ大切な機会です。特に、子供たちが地元の大人たちから直接教えを受け、体験を通して学ぶことで、より深い理解と興味を持つことができると信じています。このように「芋まんだかな」を現代に再活用することで、地域の子供たちが五島の豊かな文化や自然に親しみ、将来その魅力を次世代に伝えていくリーダーへと育っていくことを目指しています。以上がこの取り組みを通じて、地域のつながりを強化し、伝統文化を次世代へと受け継いでいくことが私達の班で出た案です。

IV. FW を振り返って

以上のフィールドワーク経験から、同じ五島でも富江と奈留島で特色が大きく異なっていること、たくさんの場所、人、出会いからの学びを踏まえて、私たちは今回富江地域への体験型イベント「放課後市」の開催を提案します。

この提案には、子どもからお年寄りまでの幅広い世代が交流できる機会をつくることで、富江町の伝統や文化を若い世代に継承していくという狙いがあります。現在、幅広い世代の交流の機会が少なくなっているため、昔ながらの富江町の文化を知らない子どもたちは多くいると考えられます。そこで、今回は「子どもたち」にフォーカスを当て、富江町の昔ながらの文化を実際に経験してきたお年寄りの方から、子どもたちに伝えていくようなイベントの開催についての政策提案を考えました。

「放課後市」の内容としては、小学校内で料理教室を行い、そこで調理した食事を大人の方々と共に、子供たちが自ら商店街にて販売するというものとなっています。調理を行う料理の具体例として、11日のワークショップでも話に上がった黒島だんご・かんころ餅・ぎょうせん飴などを考えています。

イベント開催の頻度としてはあらかじめ開催する日程を設定・固定し、開催日をおぼえやすくすることで、住民の皆さんの参加のハードルを下げ、定期的な開催ができれば望ましいと考えています。ここでは、月一の開催・毎月第一金曜日を例として提示しています。以上に述べた提案の懸念点として「宣伝方法が未確定であること」「主催や運営をどなたに任せるのか」「出店場所として商店街を利用することへの許可が得られるかどうか」という三点が考えられます。

宣伝方法としては、実際に先日のワークショップに参加された住民の方で、人づ

てで聞いて参加された方もいらっしゃるとお聞きし、住民どうしのつながりも活用できることを知ったため、富江の方々の人の良さや温かさ・つながりを活かしてイベントについて広めてもらったり、チラシや回覧板、ポスターを掲示したりすることを考えています。しかし、ポスターやチラシを掲示するのであれば、どこに掲示や配布をするのかという点も考えるべき課題です。

主催に関しては、地域のサポーターや行政、学校の先生方それぞれが連携を図る必要があります。ですが、この三者間の連携がうまくはかることができる環境にそれぞれがおかれているかどうか、それぞれの団体が主催運営に対して十分な人員を確保できるかどうかという点が懸念されます。例えば、学校外のイベントに対する学校側の協力が得られるかどうかが挙げられます。出店場所として商店街を利用することへの許可が得られるかどうかに関しては、可能であれば、商店街の空き店舗を活用した販売や、お店の一角を利用し販売させていただきたいと考えています。しかし、シャッターが閉まっている店舗には所有者がおり、テナントとして貸し出していただけるとどうか、また、店舗の状態によっては膨大なコストがかかってしまう可能性があり、それを誰が負担するのかの懸念が挙げられるため、話し合いが必要になります。

期待される結果

この政策で期待される効果としては、次の**四点**が挙げられます。

一点目は子ども、地域住民の方々が一緒に活動することで、幅広いコミュニケーションを図ることができるという点です。自分の地域に住んでいる人々を知り、交流することで地域に子どもたちの安心できる居場所を増やすことができるのではないのでしょうか。また、移住者と島民との繋がりをより強くする場になると考えます。大人同士が会話をするという機会を改めて設けるのは簡単なことではないため、こういった機会を活用することで島外から来た人が島になじみやすくなることが期待できます。以上のことから、この提案は「地域の子どもたちの居場所づくりのきっかけ」、「新しい生活を始めた方々がより安心して日々を過ごすための一助」となると考えます。

二点目は子どもたちに富江の伝統を引き継ぐことができるという点です。

富江町を散策した際に「後継者不足」という理由でシャッターを閉じている店舗が多く、代々続いてきたものが途切れてしまうこと、それを知る人間がいなくなることは大きな課題であると感じました。そのため、まちの文化を子どもたちに深く知ってもらうきっかけを提供できるのは大きな利点であると考えています。

三点目は朝市より放課後市にすることで、子供たちのご両親や仕事帰りの方々も参加しやすくなるという点です。子供たちが、普段の生活の中では関わることの少ない時間帯で生活する人々と関わる機会ができるため、交流する年代や人々の立場の幅が広がると考えられます。

次の四点目は、商店街に人々が集まり交流をすることで、街に活気が生まれ、商店街の活性化に繋がるという点です。商店街は住民の方々にとっても思い出深い、思い入れのある場所であると言えます。そのような場所に世代を超えて人が集まり、交流できるという機会は非常に貴重で有意義であると考えました。

今回、富江のワークショップに参加させて頂き、富江の住民の方々の地元に対する熱い思いを実感することができました。今回のフィールドワーク全体を通して島の魅力や課題を発見し、普段私たちができない体験をすることができ非常に有意義な活動になりました。

V. 最後に

これまで住民参加によるまちづくりにおいて、住民による主体的なまちづくりは、行政主導の住民合意形成型で進められることが多く、近年では参加する住民が公共的な価値を持った活動を進めていくための真の意味での主体形成のまちづくりが求められている⁶。

住民が自分たちの暮らしの場の問題に対して、地域の課題解決のための公益的な活動の主体を担い、様々な活動を展開することが求められている。これまでの町内会等の地縁型コミュニティだけではなく、テーマ型のコミュニティなど、新たなコミュニティが公共的なプロジェクトに関わっていく必要が求められている。また、住民にとって、このような活動に参加することは、新たなつながりややりがいが生まれるとともに、他者からの感謝を得られること、心身ともに健康になることなど、自身にとってもメリットは大きい。このような活動への参加のきっかけとして、これまで行政などが事業主体となる住民参加まちづくりがあげられる。近年の住民参加によるまちづくりでは、地域の住民がまちづくりのプロジェクトに参加し、住民自らの意志で主体的にまちづくりを進めるよう、人が繋がる仕組みづくりを支援するコミュニティデザインは有意義な手法であると考えられる⁷。

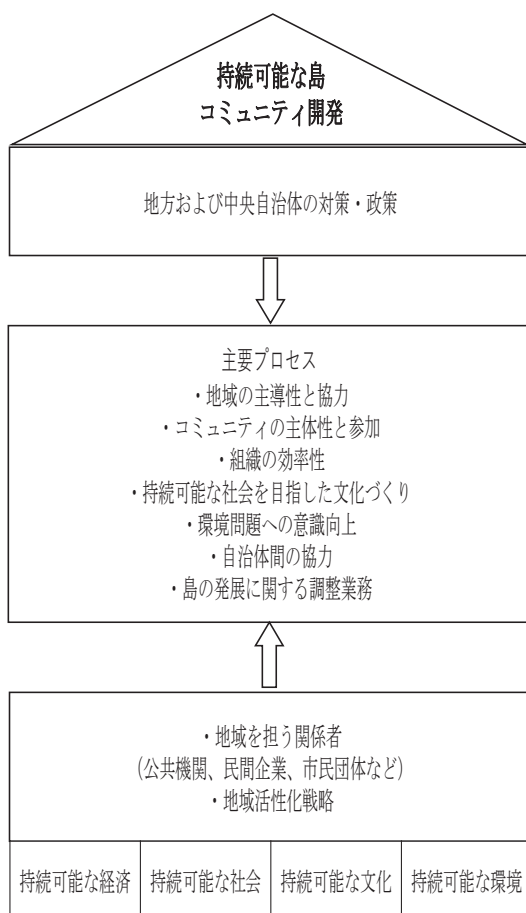
本研究で、島コミュニティに焦点を当て、主要な関係者とその持続可能な開発に関する様々な認識を分析することで、持続可能な島コミュニティの主要な特性を明らかにすることを試みた。これらは、経済の均衡ある発展、地域社会の成熟、そし

て自然環境と伝統文化の保護への継続的な取り組みである。五島市は、地域主導の取り組みを主体的に進めることで、日本の他の島々で共通である、人口減少や伝統産業の衰退といった問題に効果的に対応している。

ついに、島の社会が抱える主な問題点についても考察し、その結果は、持続可能な社会の実現には、多くの困難が立ちはだかっていると結論に至った。例え、持続可能な観光において大きな可能性を秘めているものの、十分に活かされていないのが現状である。もう一つの問題は、島内の地域が不均衡に開発されていることであり、これはより広範な戦略的計画が存在しないことが直接の原因であると考えられる。経験から、持続可能な開発の戦略目標は地域社会全体が関与することで最もよく達成されることが示されており、これはいくつかの過去の研究とも一致している（Mackelworth and Carić, 2010）。

したがって、この事例研究に基づいて、島のコミュニティの持続可能な開発のた

表3. 持続可能な島コミュニティ発展のための枠組み



め、表3の通りに、一般的な枠組みを提案した。

加えて、現在抱えている問題を踏まえれば、今後の計画においては、島全体を対象とした戦略目標の設定が不可欠である。島のコミュニティは伝統的に観光志向であるため、新しいタイプの持続可能で責任ある観光は歓迎されるであろう。観光、農業、漁業は、それぞれの場所の収容力に配慮しながら、環境を尊重する必要がある。ただし、具体的な開発目標や戦略においては、多くの研究者らが指摘するように、それぞれの島の独自性と真価を尊重することが不可欠である。よって、この枠組みは持続可能な島の発展のための一般的な指針を示すのに過ぎない。とはいえ、このモデルは既存の持続可能性モデルにとって、一定の貢献、もしくは付加価値があると私たちは考えている。

付録

1. 仕 様 書

1. 業務名：富江まちづくり協議会未来会議運営等業務

2. 目的：五島市では、平成26～27年度に市内13地区にまちづくり協議会（以下、「協議会」という。）を設置し、地域の課題解決に向けた地域住民の主体的な住民自治の活性化を推進している。

各協議会には、部会の開催や地域住民の座談会など、定期的な地域住民の話し合いをベースにした運営を推奨しているが、多くの協議会において場の創出が進まない状況があり、また、話し合いの効果的な進行ができない等の課題が生じている。

この状況を、外部の視点、大学の専門分野における学びを活用した取組により改善し、地域住民の地域づくりに対する意識醸成と主体的なコミュニティ活動の活性化を図ることを目的とする。

なお、地域住民と大学生の交流を通して、五島市に関心を持つ人材の確保につなげたい。

3. 業務期間

契約締結日から令和7年3月17日まで

4. 対象地区／業務場所

富江地区／富江地区を中心とした五島市全域

5. 業務内容

（1）地域住民の地域課題とコミュニティ活動における女性の参画推進をテーマとしたワークショップ等の運営

○事前に提供する地域の情報等により対象地域を把握する。

○グループワーク運営の方法を企画する。

○地域住民30人（5グループ）程度のグループワークを運営する。

（2）ワークショップ結果の報告書作成及び報告

○地域住民の意見、協議内容のまとめ

○改善策、協議会運営方法等々の提案

○報告会において報告書説明及び住民との意見交換を行う。

○その他

2. 当日の発表資料

よそ者が考える 富江の未来

長崎県立大学地域創造学部公共政策学科 パロリゼミ三年
河津侑実、坂口はるな、小西浩正、志賀咲歩、末綱ことは、
田橋叶望、辻明日香、直塚愛、三島茉莉、森久瑠美、森田陽菜

目次

1. 富江の概要
2. 奈留半島の概要
3. 富江と奈留半島の類似点・相違点
4. フィールドワーク報告
5. 政策提案
6. まとめ

1. 富江町の概要①

- ・人口(世帯数) 4,001人(2,277)
- ・高齢化率 42.55%
- ・富江地区は福江地区に次いで二番目に人口の多い地区
- ・昔、サンゴ漁・捕鯨・イセエビ畜養などがあったが現在はサンゴ加工が二軒残っている程度

1. 富江の概要②

- ・キャンプ村や海水浴場など自然の中で遊べる環境が身近にあり、富江町をぐるりと巡る海岸線のサイクリングコースも人気
- ・高校がないため、町を離れる人が多い
- ・陣屋石倉、指定無形民俗文化財オネオネなどの歴史的文化遺産が数多く残されている魅力あふれる町

2. 奈留島の概要①

- ・奈留島はかつて鳴嶋と呼ばれ、五島列島の真ん中に位置し面積は約25キロ平方センチメートルである
- ・奈留島の周辺の葛島(かずらしま)、前島などの付属島を町域として有している
- ・奈留島は、歴史が深く奈良時代に遣唐使や遣明船などの寄港地であったという記憶が残されており、遣唐使が中止となった後も大陸と日本の中継地として発展してきた

2. 奈留島の概要②

- ・人口は昭和32年11月時点で1万人を超えていたが、現在では半分以下の約1500人となっている
- ・平成16年に下五島一市五町の合併により現在は長崎県五島市奈留町となっている
- ・現在も主な産業は漁業
- ・近年は世界遺産の江上天主堂や豊かな自然を生かした観光にも力を入れている
- ・人口減少改善の取り組みとして離島留学生の受け入れを開始している

3. 富江町と奈留島の類似点

人口減少

公共交通機
関の少なさ

3. 富江町と奈留島の相違点

会議頻度

産業



4. フィールドワーク 報告

9/11開催 フィールドワーク報告

・富江の商店
街散策

・鬼岳の散策

・山本二三美術館、
郷土資料館の見学

・五島うどん、
椿そばの美食

・富江の方々との
ワークショップ

9/12開催 フィールドワーク報告

・奈留校

・江上天主堂

・千畳敷

・もやいば
「どがんね」

・バロリ フレンディ先生

・奈留島の
おもしろいところ

・しまなび舎

5. 政策提案

体験型イベント

「放課後市」の開催

ねらい

幅広い世代が関わるイベントを開催し、富江町の伝統をつないでいく。

内容

小学校で料理教室を行って、作ったものを商店街で販売する。

頻度

月一（開催する曜日を決めておく）
例：毎月第一金曜日

懸念点

・宣伝方法をどうするか（チラシ、回覧板、ポスター、地域のつながり）

・誰が主催するか
（地域サポーターと行政、学校の先生）

・商店街側の許可が得られるか

期待される効果

・学校での体験型イベントでは、子供、地域住民の方々が一緒に行うことで、コミュニケーションを図ることができる

・また、子供たちにも富江の伝統を引き継ぐことができる

・放課後市にすることで、朝市よりも子供たちの親や、仕事帰りの人たちが参加できる

・商店街の活性化にも繋がる

3. 活動風景の写真





謝辞

本研究は五島市から：「富江まちづくり協議会未来会議運営等業務」の助成（受託研究）を受けたものである。五島市の地域振興部地域協働課 地域づくり協働班の山下大輔様、野澤努様、北川千穂様、そして、五島市の住民の方々、また、その他関係者の皆様に心より感謝いたします。

参考文献

1. Bridger, J. C., Luloff, A. E. & Brennan, M. A. (2006). Achieving sustainable communities. In McKinstry, R. B., Ripp, C. M. & Lisy, E., Eds., Biological conservation handbook: State, local, and private protection of biological diversity, pp.393-416.
2. Dempsey, N., Bramley, G., Power, S. & Brown, C. (2011). The social dimension of sustainable development: Defining urban social sustainability. Sustainable development 19 (5), pp.289-300.
3. Mackelworth, P. C. & Carić, H. (2010). Gatekeepers of island communities: exploring the pillars of sustainable development, Environmental Development and Sustainability, 12 (4), pp.463-480.
4. 今村智子、“住民主体の地域づくり活動における継続性に影響がある活動間の関係”、地域活性研究, 2024年、21巻、pp.61-69.
5. 若原幸範、“地域づくり主体の形成過程－内発的發展論の再定義を見通して－”、日本社会教育学会紀要、2007年、43巻、pp.83-92.
6. 出口寿久、他、“地域運営組織における活動拠点としての社会教育施設の運営および活用実態－小規模多機能自治推進ネットワーク会議会員を中心として－”、日本建築学会計画系論文集、2022年、87巻、796号、p.975-986.
7. 久 隆浩、“地区における住民主体のまちづくりプロセスのあり方に関する研究”、土木計画学研究・論文集、Vol.22 no.1、2005年、pp.189-194.

脚注

- 1 今村智子、“住民主体の地域づくり活動における継続性に影響がある活動間の関係”、地域活性研究, 2024年、21巻、p.61.
- 2 Ibid.
- 3 若原幸範、“地域づくり主体の形成過程－内発的發展論の再定義を見通して－”、日本社会教育学会紀要、2007年、43巻、pp.89-90.
- 4 出口寿久、他、“地域運営組織における活動拠点としての社会教育施設の運営および活用実態”、日本建築学会計画系論文集、2022年、87巻、796号、p.975.
- 5 久 隆浩、“地区における住民主体のまちづくりプロセスのあり方に関する研究”、土木計画学研究・論文集、Vol.22 no.1、2005年、p.194.
- 6 竹ヶ原 公、“住民サイドの視点による「住民主体のまちづくり参加プロセス」についての考察－青森県平内町藤沢地区における住民参加意識のステップから－”、p.27.
- 7 Ibid. p.28.